ン以上とか何キロ以上とかいうふうにどれだけの重さを排出しているかで決められているのですが、現在すごく問題になっている SPM のように、一つの粒子がどれだけ細かいかということを基準にする見方もあると思います。重量をいっぱい出してないからいいかというとそうではない場合もあるので、規制に関する単位について、どういう基準で評価すればいいのかは今後変わってくると思うのですが、そのことに関して行政ではリスクコミュニケーションをどういうふうに捉えていかれるのでしょうか？

A:ひとつの提案として考えたいのですが、今 SPM のことが出てきましたが、これは車などの移動発生源なんです。移動発生源の場合の考え方と企業に対する考え方は違うんです。企業に対してこういうことを求めるときには、やはり原材料が何トンか、商品は何トン作って、どれだけ出荷したかというのが企業の活動の中心ですから、その企業に対して、あまり過大な細かいことを要求しても、たぶん出てこないと思うんです。ですから、まずは企業に対しては日常の営業している数字を使えるように指導して行く。移動発生源の車については、ご指摘の粒子状物質がありますので、そちらのほうを反映してゆくといいと思います。まず、このやり方のポイントはすごく長い時間をみてやらなくてはいけないということです。いろんなご指摘はあると思うのですけれど、出来るところからコツコツとやっていかないと、たぶん難しいと思います。重量だけではなく、粒子についても考えろというのであれば、それはまたこれからの問題だと考えています。まずはひとつずつ順番にやっていくのがいいと思っています。

Q2:リスクを受ける人とベネフィットを受ける人が別々の場合があると思うのですが、そう言った場合のコミュニケーションとして、行政の人はどのように対応してゆくのかを教えてください。

A:例えば工場近傍の方を考えるといいですよね。工場の近傍の人は、その工場が生産している製品を使うわけではないですから、あまりベネフィットは感じてない。ただリスクだけを感じている。そういうことになると、地域ということを考えると、その工場は地域の中で活動しているわけですから、工場が持っているリスクを住民の方にどういうふうに知らせるかというのがポイントになってくると思います。リスクはありますが、その状況をずっと継続して、ただリスクを作り続けるんではなくて、ある程度いい方向にもっていきましょうという対話を周りの住民の方達とやっていきましょう。それがリスクコミュニケーションなんです。だから、ずーっと同じことをやるんではなくて、有害性のある物質で他のものに変えられるものであるのなら、来年は半分にしましょう、再来年は 3 分の1にしましょうという具合に、お互いに歩み寄っていくような場を行政として作っていかなくてはならないだろうと考えています。■

プロジェクト報告　◆科学館プロジェクト③

科学館プロジェクトの今後の展開

プロジェクトリーダー　古田ゆかり

評価に関する勉強会のあと、助成金獲得ができなかったこともありしばらく活動を停滞させてしまい、今回の土曜『どよう便り』で報告すべき事柄ましたが、秋に向かって新たに動き出したいと思います。

まずは、科学館プロジェクトでの当初の目的であった、専門家と非専門家との橋渡し、非専門家が科学的社会問題における判断力を身につける、アップトゥデイトな科学的話題の理解と判断、科学館同士または科学館と他の研究機関・企業などとのネットワークづくりなど、当初提案したさまざまなテーマがありますが、これらのテーマに沿って科学館で実際にプレゼンテーションするプログラム作りに着手したいと思います。プログラム作りには、プロジェクトの参加者独自の、テーマ、想定対象者、手法や必要な機材の開発、プレゼンテーション技術の習得などを含みます。このようにして、土曜講座の科学館プロジェクトとしての中身を充実させながら、実際の科学館に実践の場を求めていくという方向で実績を積みましょう。このような活動を行いながら、各科学館とのネットワークを作り実際の科学館運営に関する実状等を把握しながら評価も含めた科学館研究を行います。詳細はプロジェクト参加者に提示し、骨格がかたまりしだい『どよう便り』で報告いたします。

残りの字数を使って、先日訪れた興味深いミュージアムのお話をしたいと思います。

「明治の酒蔵・酒ミュージアム」（兵庫県西宮市）です。ここは、「白鹿」の醸造元である辰馬本家酒造が設立した博物館です。この場所に実際に酒蔵がありましたが、その跡地をミュージアムにしたものです。震災で倒壊したものの実際の竈、レンガの壁など半壊しつつも残っていてそれを展示していて、順路は操業時の酒造りの工程に沿って作られていました。

このようなミュージアムは震災後がれきを処理する以前の早い時期に震災そのものも含めて展示するという決定されていなければならないと想定され、その判断には感心しました。酒造りの道具が残った限り展示されていて、大人の身長よりも大きな直径の桶もたくさんありました。このような大きな桶があるということは、マンガ『夏子の酒』や写真などで知っていただけなので、実際にその中に入ってみると迫力が違います。実際の大きさを感じるのはミュージアムの典型的な手法ですが、その意味を久しぶりに感じることができました。またほかの道具についても、たとえば桶や櫂などさまざまな道具を実際に手に取りそれを木製の台におくと横のモニターに道具の名前や用途、簡単なクイズなど 15 秒程度の映像が映るようになっています。道具は大きい物もけっこうあり、使い込んだ木の感触や重さを感じる

ことができます。

酒造りの順路とは別に「震災の部屋」というスペースがあり、震災直後の、大きな桶やさまざまな道具が壊れて散乱した酒蔵の様子がリアルに残されていて、酒造りと震災の両方のリアリティを感じることができます。職人たちが大事に使っていたということが感じられる年季の入った道具と、震災の無惨な姿の両方をリアルに感じることができ、物づくりに対する「人」の存在を強く感じることのできる展示に仕上がっていました。いずれ機会を作ってインタビューしてみたいミュージアムでした。

http://www.hakushika.co.jp/museum/index.htm ■

古田ゆかり プロフィール(?)

最近、圧力鍋料理に凝っています。根菜料理もおこわも圧力鍋なら早くできておいしいということを実感。特に休日の朝、米から炊く中華粥にぞっこんです。干しエビと干し貝柱、ネギにしょうゆにごま油、そしてピータン。これに熱いウーロン茶があればなんにもいらない!ってくらい幸せです。中華ちまきもおすすめっ。

プロジェクト報告◆科学技術評価プロジェクト④

量子化機能素子 「評価報告書」を読み比べて

プロジェクトメンバー　尾内隆之

春の合宿からだいぶ間があいてしまいましたが、6月 22 日(土)に、合宿で決まっていた宿題をみなで持ち寄って勉強会を開きました。その宿題は、「量子化機能素子研究開発プロジェクト」について経済産業省が作成した評価報告書を読み比べ、問題点・疑問点を拾い上げるというものでした。また今回から、吉澤剛さんが新たにメンバーとして加わってくださいました。吉澤さんには、この欄を担当するときにあらためて自己紹介していただこうと思いますが、科学技術政策について研究している方で、大きな戦力となってくださるはずです。

●勉強会(6/22)の内容

6月 22 日には、その吉沢さんも初参加で2ヶ月ぶりに勉強会をもちました。各自の自己紹介・近況報告と合わせて、最近の半導体研究開発の動向について藤田さんが情報を提供してくれました。現在、当プロジェクトで追っている「量子化機能素子研究開発」は、半導体に関する「国策」であるわけですが、民間の側でもさまざまな企業提携や統合によって国際競争力を再び取り戻そうとしています。競争力低下に対する企業の危機感と悩みは深刻で、そこに官の予算獲得合戦が絡んで巨額の税金が不透明な印象を残しつつばらまかれていく、という構図は相変わらず続いているようです。こうした構図はあちこちにあるはずで、そこに市民の側から風穴を空けていく方策を探り出さねばなりません。

まず、宿題となっていた「量子化機能素子」評価報告書の比較・分析について、各自の見方をつき合わせて議論しました。メンバーの共通認識として、「評価書」と言いつつも「評価」の体をなしていないことが指摘されました。「評価」の基準や方法を単純に一般化できないという難しさはあるにせよ、その難しさを克服していこうとする姿勢が何ら伺えない「評価書」には、やはり大いに疑問を感じざるを得ません。その原因には、評価にあたって外部の目を反映させようとする意識の欠如が挙げられます。評価部会のメンバーは、もちろん外部の研究者やジャーナリストですが、その発言は、できあがった評価書になると実に無難なところに収束しています。実施主体が評価にあたってもイニシアティブを取る、という「内部評価」の限界は、私たちが読んだいくつかの評価書からも如実に見て取れます。

当プロジェクトの進め方については、これ以上「評価書」のみを読んでいてもさほどのアウトプットは期待できないことから、いよいよ積極的に「外へ出よう」という方向になりました。具体的には、研究開発プロジェクトを立ち上げる合意が、どのようなシステムの中で、どのように形成されていくのか、市民にもわかるように見取り図を得たいということ。また、実際に「評価書」がどのような作業手順で、誰の責任の元に「作文」されていくのか、文字だけでは伝わってこない事情をさぐること。この二点を切り口として、関連人物へのインタビューも行おうと考えています。特に、研究開発のテーマがどのような経緯で選ばれるのかは、市民にとって非常に見えにくい部分ですが、外部からの「評価」を考える上では、まずここを把握しなければなりません。〈官僚ー研究者〉コミュニティの内幕を、市民にとって有益な形で明らかにする作業に取り組んでいきます。

もちろん、可能な限り研究開発資金の流れも追いたいのですが、こちらは情報入手がかなり困難と思われ、今後の検討課題となりました(どなたか良い知恵をお持ちの 方、ぜひアドバイスを!)。

●新藤宗幸著『技術官僚』(岩波新書)の紹介

春の合宿のときにも注目したこの本について、簡単に紹介します(あ、「おもしろブックス」にとっておけばよかったかな……)。この本は、政治学分野でも「コロンブスの卵」と言われています。行政の作用を、官僚の「資源獲得戦略」との関わりで分析する視点の重要性は、つねづね著者が強調していることですが、技官の役割をこうした視点から分析した仕事はこれまでほとんどなかったからです。「技官の王国」といった言葉はこれまでも聞かれてきましたが、その技官の役割が、具体的に官僚の「資源」拡大戦略の中でどう機能し、公共事業や薬害事件にどう結びついているのかを明快に記述しています。つまり、企業の論理と官僚制の論理に相同性があるとすれば、それはまずもって自己保存・自己拡大への欲求にあるわけで、行政を市民や企業との関わり方のみから批判するにとどまらず、官僚